尺度使用マニュアル

＜尺度名＞

「菊池・有光／自己意識的感情尺度 - 12 シナリオ版：KA-Jikokan-12」

＜測定概念＞

最近では、共感や個人的苦痛、恥、罪責感、負債感は、プライドや高揚感とあわせて、自己意識的感情（self-conscious affect あるいは emotion）と呼ばれることが多くなっている（Tangney & Fischer,1995）。自己意識的感情尺度（KA-JiKoKan-12）は、自己意識的感情の一部である 6 種類の感情（対人的負債感・個人的苦痛・罪責感・恥・役割取得・共感的配慮）を、シナリオ形式で測定しようとする尺度である。

＜適用範囲＞

大学生に対して適応可能である。

＜尺度構成手続き＞

有光（2002）の罪悪感喚起状況尺度および成田・寺崎・新浜（1990）の状況別羞恥感情質問紙から罪責感，恥を経験する 33 の状況を抜き出し，33 場面のシナリオを作成した。また、この 33 場面のシナリオごとに上で見た 6 つの感情（対人的負債感・個人的苦痛・罪責感・恥・役割取得・共感的配慮）を示す短文（全体で 198 文）を作成した。

大学生 628 名（男子 183 名・女子 445 名）に 33 場面×6 感情への回答を求め，I-T 相関が 6 つの感情すべてで.35 以上であったシナリオ 23 場面を残し，確認的因子分析を行った。その結果， 因子負荷量が各尺度とも.40 以上のものは 23 場面中で 12 場面であったため，最終的に 12 シナリオを用いてこの尺度を構成した。

＜信頼性＞

6 尺度別のα係数は，.72 から.82 であり、ある程度の内部一貫性があるといえる。 また、 大学生 84 名（男子 26 名・女子 58 名）について，2 週間間隔で実施したこの尺度の再テスト信頼性係数は，.68～.80 で，この尺度が安定性を持つことを示している。

＜妥当性＞

因子的妥当性については，12 シナリオで確認的因子分析を行った。5 つの因子モデルの中では，想定通り 6 因子が相関関係を持つ「6 因子相関モデル」が最も適合度が高かった(RMSEA=.0641, AIC=3891.35)。ただし，因子間相関が高く， 6 尺度の弁別的妥当性に関しては検討の余地がある。

収束的妥当性については，罪悪感喚起状況尺度(有光, 2002)，状況別羞恥感情質問紙（成

田他, 1990)，対人的反応性指標（Davis, 1983)，心理的負債感尺度（相川・吉森, 1995）との相関を求めたところ，KA-Jikokan12 と対応する尺度間に有意な相関が認められた。構成概念妥当性については，向社会的行動尺度・大学生版（菊池，１９８８)，日本版Ｂｕｓｓ- Ｐｅｒｒｙ攻撃性質問紙（BAQ：安藤ほか, 1999）との関連を検討した。その結果，予想通り罪責感と身体的攻撃に負の相関が認められたが，向社会的行動とは有意な相関が認められなかった。この点は，今後の検討課題である。

＜採点方法＞

回答方法は,「必ずそうする／そう感じる」から「決してそうはしない／そうは感じない」までの 5 件法である。採点は「必ずそうする／そう感じる」が５,「決してそうはしない／そうは感じない」が１である。回答は前述の 5 件法で求めるので，各尺度の得点は１２－６０の間に分布可能である。

＜尺度の使用について＞

項目の改変は行うべきではない。下位尺度ごとの使用は可能であるが，標準化データとの比較が困難となる。

＜出典文献＞

菊池章夫・有光興記 (2006). 新しい自己意識的感情尺度の開発 パーソナリティ研究, 14, 137-148.

＜連絡先＞

所属：岩手県立大学　氏名：菊池章夫
e-mail：akio-k@ZC4.so-net.ne.jp

＜無料・有料の別＞

無料。

＜著作権関連情報＞

転載は，著者の承諾を得てください．尺度を研究で使用した場合は，利用を明記してください.
原則は以上ですが、詳しくは著者に問い合わせること.

＜その他＞

教示文は，尺度の PDF ファイルを参照のこと。